



Artist in
Residence
Documents
2023

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

なら歴史芸術文化村

滞在アーティスト誘致交流事業 文化村 AIR

ドキュメント 2023



なら歴史芸術文化村

Artist in Residence Documents 2023

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR
ドキュメント 2023

文化村でつながる、文化村から広がる。

本年度で2年目となる「なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業」に全国から多数ご応募いただき、誠にありがとうございました。さまざまな視点から、奈良に魅力を感じてくださるアーティストが沢山いることを大変嬉しく思っております。

特に今回は、アーティストが、なら歴史芸術文化村を拠点に施設が所在する天理市や、山の辺の道で繋がる桜井市なども含めた広い範囲で制作活動していただき、地域の人々と交流することで社会が繋がるプラットフォームを創ることを目指しました。

選出された美術家の杉原信幸、帽子作家の中村綾花の両氏においては、滞在制作から成果発表までの間、来村者、地域・天理大学学生などの人々との交流(対話・共演)を大切にする姿がとても印象的でした。滞在終了後においても末長い地域とのつながりが期待されます。

なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

Connecting at Bunkamura culture village, and spreading from here.

We sincerely thank everyone for numerous applications we received for the second year of the Bunkamura AIR. We are sincerely delighted to see many artists appealing Nara from various perspectives.

In particular, this time, we aimed for artists to engage in creative activities over a wide range of areas, including Tenri City, where Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex is located, and Sakurai City, connected by Yamanobe-no-michi Trail, in order to create a platform that connects society through interactions with local people.

We were impressed by the way Nobuyuki Sugihara, an artist, and Ayaka Nakamura, a hat artist, who were selected to the residency program, maintained close communication with visitors, local residents, and Tenri University students during the period from the production to the presentation of the results of the residency. We look forward to long-lasting ties with the local community even after the program is over.

Executive committee of
Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex
Bunkamura AIR

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR 2023事業概要

「なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR」(以下、「文化村AIR」)は全国からアーティストを公募し、一定期間文化村で滞在・リサーチ・制作・作品発表を行うアーティスト・イン・レジデンス事業です。なら歴史芸術文化村が位置する天理市は、平成30年度よりアーティストを誘致し、市民がアートに触れる機会を創出するなど「芸術文化に出会える街」として取り組みを行ってきました。文化村はその開村を機に天理市の取り組みを継承発展し、アートと社会をつなぐプラットフォームになることを目指し、「文化村AIR」を令和4年度(2022年度)より始動させました。

令和5年度(2023年度)の文化村AIRは15組の応募の中から杉原信幸×中村綾花が選ばれました。

彼らは長野県大田市を拠点に、アーティスト・イン・レジデンスや芸術祭などに参加し、国内外で作品制作を行う傍ら「信濃の国原始感覚美術祭」を毎夏主催しています。今回は、天理に伝わる昔話『あからがしら』が制作の鍵となり、2ヶ月に及ぶ滞在制作が始まりました。

2023年10月からの滞在制作では、周辺地域(天理市、桜井市)において昔話にまつわる伝承がある地域の歴史風土や祭りなどをリサーチし、作品に使用する不要になった着物を地域の皆さんから募集しました。この話が人から人へ伝わり着物が集まり、アーティストと地域の人との交流が生まれました。後に集まった着物で地域の方々と一緒に縫い紡ぐ「手縫いワークショップ」が各地で行われ、「あからがしら」の体となる大布が完成しました。

成果発表展では10日間という短い会期中で、なら歴史芸術文化村では「あからがしら」、桜井市にある山の辺みずえ画廊では「みわのへび」と2会場にわたり展示とパフォーマンスを行いました。パフォーマンスには全国各地から「原始感覚美術祭」のメンバーで構成される一座が集まり、滞在期間中の出会いや、ご縁がこの展覧会を作り上げました。

杉原信幸×中村綾花 あからがしら

《滞在期間》2023年 9月12日～10月10日(リサーチ期間)
11月10日～12月10日(制作・成果発表期間)

《成果発表展》

- 会場1:なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ
会期:2023年12月1日～12月10日
- 会場2:山の辺みずえ画廊(桜井市)
会期:2023年12月7日～12月9日

《あからがしらの舞》

2023年12月10日

会場:なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ

出演:杉原信幸、中村綾花、安土早紀子、黒田将行、小関吉浩、佐々きみ菜、佐藤啓、つむらさひ、天理大学雅楽部 吉澤救(笙)、川口喜一郎(箏)、藤山隆三(龍笛)

《関連イベント》

- 「天理☆みりょく発見～Be a time traveler～」地元小中学生との交流会
2023年10月7日 会場:なら歴史芸術文化村芸術文化体験3階交流ラウンジ
- 手縫いワークショップ
 - ①2023年10月 6日 会場:桜井市役所1階地域交流センター
 - ②2023年11月14日～11月19日 会場:Art Space TARN
 - ③2023年11月26日 会場:天理駅南団体待合室
 - ④2023年11月30日 会場:荒薪町公民館
- お守りづくりワークショップ
2023年12月2日 会場:なら歴史芸術文化村芸術文化体験3階スタジオ301
- ピアノと即興舞
2023年12月9日 会場:山の辺みずえ画廊
出演:安土早紀子(ピアノ)、黒田将行、小関吉浩、佐々きみ菜、佐藤啓、杉原信幸、つむらさひ、中村綾花

《事業にご協力いただいた皆様》

朝岡工房／荒蒔町自治会の皆さま／NPO法人原始感覚舎／株式会社吉野森久銘木店
Café samanala garden PIZZA Arcobaleno／小関吉浩
桜井市立埋蔵文化財センター／信夫貝鉦製作所／田村絵画・立体教室／天理大学雅楽部
奈良県文化財保存事務所／野本暉房／紅して踊り保存会／夜都岐神社(敬称略50音順)
着物を提供して下さった方々／手縫いワークショップに参加して下さった方々

《主催》

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)

なら歴史芸術文化村

滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR

令和4年度(2022年度)より開始したアーティスト・イン・レジデンス事業。奈良県が世界に誇る歴史・芸術・文化を肌で感じ、アーティストの新しい視点や切り口で活動を行い、なら歴史芸術文化村を拠点に制作活動を行う中で、人々が作品とふれ合うことで新しい感性を導き出し、交流することで地域の魅力を歴史や芸術と繋げて広く発信することを目的とする。

《公募要項》

- 招聘期間 [リサーチ期間]
2023年9月12日(火)～2023年10月10日(火)/29日間
[制作・成果発表期間]
2023年11月10日(金)～2023年12月10日(日)/31日
- 募集期間 2023年6月12日(月)～2023年7月21日(金)
- 結果発表 2023年8月上旬頃
- 主催 なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)
- 招聘人数 1名または1グループ
- 支援内容 制作費400,000円
交通費100,000円(上限) 宿泊費6,600円/泊(最大60日)
- 制作場所 なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3Fスタジオ301
- 支援内容 提出された資料をもとに、なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会会長が委嘱した各審査委員の審査結果を参考に、主催者がアーティストを選考し、決定する。

《受入条件》

- ・現在活動している国内在住のアーティスト(表現者)であること(ジャンル不問)。
 - ・18歳以上であること。(令和5年4月1日時点)
 - ・地域の人々に対して、芸術文化に関心が持てる活動ができること。
 - ・地域の人々と共に、制作活動や、成果発表ができる内容が含まれていること。
 - ・主催者側で編成するワークチーム(地域とアーティストを繋ぐ役割を担うサポーター)と、互いに協力しあい、制作活動を行うこと。
 - ・滞在期間中、奈良県の魅力に触れ、フィールドワークを通じて地域の人々との交流を積極的に行い、制作すること。
 - ・作品の制作場所は、なら歴史芸術文化村 芸術体験棟3Fスタジオ301を基本とする。希望がある場合は、主催者と協議した上で決定する。
 - ・制作場所は公開されており、来訪者などが自由に見学できるようになっているため、開かれた環境下で制作を行うこと。
 - ・滞在期間中に作品を制作し、主催者と協議の上で成果発表を行うこと。
 - ・制作、生活において基本的にアーティスト自身で行うこと。
 - ・設営から撤去まで主体的に行うこと。
 - ・日本語での意思疎通ができること。
 - ・健康状態が良好であること。
 - ・Zoomを利用したオンラインミーティングができること。
- ※地域:文化村が所在する天理市、文化村周辺から山の辺の道でつながる桜井市を想定

《招聘条件》

主催者とアーティストは、以下の条件について、覚書を約定する。招聘条件における主催者からの負担内容は、アーティストが単身で来県することを原則としたもので、基本的に同伴者は不可とし、1グループに対しても単身分の負担内容とする。

[1.来県に関する事項]

旅費

- ・主催者は期間中の2回分の往復交通費を支給する。支払い時期は、アーティストが文化村に到着した後とする。
- 上限は100,000円とし、上限を超える交通費はアーティストの負担とする。
- ・原則として、公共交通機関を利用し、居住地の最寄り駅から天理駅間の合理的かつ経済的な経路の鉄道等往復運賃(2回分/上限は100,000円)を旅費とする。なお、車を利用する場合は奈良県の旅費規程に準ずる。

[2.制作、成果発表に関する事項]

制作費

- ・主催者は、制作活動に係る費用として(調査費、材料費、設営費、撤収費を含む)として400,000円支給する。支払い時期はアーティストが文化村に到着後1週間以内とする。

制作場所

- ・なら歴史芸術文化村 芸術体験棟3Fスタジオ301を基本使用し、希望がある場合は、主催者と協議した上で決定する。
- ・自身が必要とする機材、工具などは持参すること。
- ・制作現場の清掃は、アーティストの使用範囲内はアーティスト自身が行うこと。
- ・館内のWi-Fiを使用できるが、PC及び周辺機器の貸出しはしない。
- ・その他館内での規則などを守ることを。

成果発表

- ・滞在期間中に成果発表を行うこと。展示や公演など成果発表の会場と会期については、主催者と協議の上で決定する。但し、展示の場合、会期は延べ1週間以上とする。
- ・アーティストと来場者の交流を大切にしたいため、会期中はできる限り会場対応を行うこと(対応日数は相談に応じる)。
- ・設営や撤収の作業は原則としてアーティスト本人が行うこと。(補助的作業については要相談)。
- ・成果発表期間中、メンテナンスが必要な場合は、アーティストが責任を持って行うこと。
- ・主催者は、成果発表に係る用品(キャプション、パネル等)はアーティストと協議の上、用意する。
- ・アーティストは原則成果発表終了後、作品を自身で撤去しなければならない。作品を持ち帰る場合の梱包作業及び輸送費はアーティストの自己負担とする。
- ・主催者が記録した写真、映像等の著作権及び公益に資する広報宣伝のためにそれらを使用する権利は主催者に帰属する。主催者及び主催者の了承を受けた者はこれら全てを無償で使用できるものとする。
- ・本事業で制作された作品の著作権と所有権は全てアーティストに帰属する。

[3.取材にかかる指示の厳守]

- ・取材する場所、方法及び事前許可について、主催者から特段の指示がある場合、アーティストは必ずこれに従うこと。

[4.滞在生活に関する事項]

生活：滞在中の生活費は支給しない。

宿泊：主催者が宿泊先を紹介するが、紹介施設以外の施設に宿泊することも可能。宿泊費は6,600円/1泊(最大60日)を上限として支給する。

保険：傷害保険及び、健康保険等はアーティスト自身で加入すること。主催者は保険加入等に関する義務は負わない。

- ・移動手段として、電動自転車の利用(無料)が可能。自転車保険の加入は主催者側で行う。

[5.その他]

活動記録

- ・主催者は本事業の記録のため、記録集を作成する。
- ・主催者はアーティストの作品及び活動の記録を写真、映像で記録するため、アーティストは協力すること。なお、作成した記録はアーティストにも提供できるものとする。

マスコミ対応

- ・アーティストはマスコミ各社からの取材申し込みがある場合、可能な限り協力すること。制作に支障をきたしたり、プライバシーを侵害されたりする恐れがある場合は主催者に申し出、取材を断ることができる。

ワークチーム(サポーター)

- ・滞在期間中はワークチームが、リサーチの手伝いや、地域とアーティストを繋ぐ役割を担う。地域との取組みについては、アーティストとワークチームで検討し、活動すること。その他のサポートについては、主催者と協議の上決定する。

新型コロナウイルス感染症等について

- ・条件により、本事業の実施や継続が困難であると判断された場合、主催者とアーティストが状況に応じて協議し、その対応について決定する。

西尾 美也

美術家/東京藝術大学 准教授

民俗学や考古学に関心をもつ杉原信幸さんと中村綾花さんによるユニットは、自らの制作の目的について、「生活とアートが分けられる以前の豊かな精神性と身体性を蘇らせることで、生活と美しさのともにある文化を呼び覚ます」と表現しています。

多くの人がすでに知っている「アート」に比べると、お二人の考え方はすぐには理解し難いかもしれません。ただ、かれらの姿勢や制作学は、なら歴史芸術文化村の「複合的」なあり方に呼応するものでしょう。

今回のプランでも、①天理の昔話のリサーチ、②着物や帯を縫い繋ぐワークショップ、③楽器や舞で参加してくれる人の募集といった、お二人の特徴が反映された内容になっています。また、お二人のこれまでの活動の中で、天理参考館で見た彫刻や、三輪山の形にインスピレーションを得ている点も重要です。滞在することになる土地、そこで出会う人や素材、そして自らの感性とが、有機的で複合的な関係となって現れてくるのが期待できるからです。

お二人と出会うことになる市民の方々が、アートという「わからなさ」に一步踏み出すこと、かれらが目指す「この土地自体が語りだすような制作」に身を委ねてみるこの機会を与えられると考えれば、それはアートを通じた本質的な「交流」事業になるはずです。

服部 滋樹

graf代表/クリエイティブディレクター/2025日本国際博覧会協会CDCアドバイザー/
京都芸術大学 教授

お二人の活動が、この地の魅力を再価値化し、人々に伝えるべく可視化や体験を促して下さるように思えた。AIRの基本には、滞在する地の歴史や受け継がれた状況對話や交流と様々な条件下でリサーチを行います。その方法論は無数。オリジナルなりサーチ手法によって生み出される作品群に期待をしたい。お二人のキャリアから感じる創造性は互いの手法を駆使し、導き出される空間生と体験だと思ふ。杉原さんは国内・海外問わず国際芸術祭での発表と、各地での民族学的リサーチによって生み出される基盤と土地、風土への解釈によって紡ぎ出される物語性ではないだろうか。一方、

中村さんの手仕事は帽子作家として行われてきた繊細に組み立てられた質感のあるカタチとして生み出されてきたのだろう。このような作家によって、数千年の歴史のレイヤーを各層事に捲り上げ狭間に起こっていたであろう出来事を私たちの手前へと表してくれるのではないだろうか。そして今までに無い新たな体験を共に歩んで行けそうだ。

松本 耕士

なら歴史芸術文化村プログラムディレクター

アートは、なら歴史芸術文化村が有するコンテンツの一部ではありますが、全てではありません。

本施設のプログラムディレクターである私は、この特性をポジティブに捉えることを心がけています。

アートに限らず、本施設を構成する様々な要素が有機的に連携することによって、施設としての可能性をさらに広げていくことが重要だと考えています。

この思考は、アーティストをはじめ本施設に関わる人々において、さらには周辺地域のポテンシャルにおいても、新たな可能性に繋がるものと確信しています。

今回は「杉原信幸×中村綾花」のユニットが選考されました。

「『わたしを超えて、地が語りはじめること、それこそが表現』と語るお二人にこそ、『この地』を素材として提供したい。」と思いました。

構想においては、どのようなこだわりを持って『この地』をリサーチされるのか。

制作においては、どのようなアプローチで『この地』を表現されるのか。

今から楽しみでなりません。

アーティストインタビュー 杉原信幸 × 中村綾花

実施日：2023年12月10日

(「あからがしらの舞」終了後)



——— 普段はどのような活動をされているのですか。

杉原 長野県の大町市を拠点に、アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)や芸術祭などのフェスティバルに参加するため国内外の様々な場所に行き、作品制作をしています。また、大町では「原始感覚美術祭」というフェスティバルを2010年から毎年夏に開催しています。

中村 元々私は農家だったこともあり、生活に近いことが好きで、普段は帽子を制作していたり、縫い物をしたりしています。彼(杉原)はずっと美術をやってきています。現代では、生活と美術の間には距離があるように思いますが、元々はすごく近いところにあったはず。2人で活動することで、その2つが分けられる以前のあり方を呼び起こすようなことができればと思っています。

——— **今回、奈良や「文化村AIR」に関心を持ったのはどういったきっかけがありましたか。**

杉原 学生時代に日本を旅していて、三輪山や崇神天皇陵などを歩いたことがあり、白い場所だなどと思っていました。そこで今回、「文化村AIR」の募集があり、ぜひここでやりたいと思って応募しました。

中村 地域の伝統的な習俗や信仰に興味があり、調べるのが好きなのですが、その中で「あからがしら」という言葉がぱっと目に入ったその瞬間、「あからがしら」をつくるイメージが頭に浮かびました。「あからがしら」は洪水の記憶を”川が暴れた”という物語に変換して伝承されたものなのではないかという直感からはじまり、2020年に新潟で遡上してきた鮭をモチーフにした作品を作ったことで「川」というものを見つめ直す事をしたいと思っていたこと、また、カナダに先住民のリサーチに行った時に、レッドシダーの赤い太い縄を装身具として身にまとい、踊る姿を見て赤という色も気になっていたこと。今回、そんな出会いや関心がひとつに結びついていく気がしました。

——— **リサーチという手法をとられることが多いと思いますが、そこにはどのような意図がありますか？**

杉原 お祭りなど、土地の歴史・人々が紡いできた文化に関心があり、それを見て、体験することに関心があります。私は長野で生まれましたが東京で育ったので、伝統的な祭りを受け継ぐ体験をしていません。都市で暮らすことで失ってしまったものを、土地土地に残る文化を体験することで、ひとつひとつ自分の身体に取り込み、それがかたちになっていくことを大切にしています。だからリサーチが重要ですし、自分というものを表現したいというよりも、その土地自体が語り出すことのほうが面白いと思っているので、土地そのものや、その土地に暮らす人々に出会うことが作品に繋がっていきます。「文化村AIR」はリサーチ期間を長くにとって、地域との関わりを重視している事業だったので私たちがやりたいことと重なりました。

中村 素材も着物や木など、元々あったものから見出していきます。パフォーマンスも即興ですが、リサーチ中に見たもの体験したものが出てきます。出会った人のお話、お祭りで見た動き、そこで聞いた鈴の音とか、そういったもの。たくさんものを見て、そのエッセンスが重なり合い、形が現れてくるような感じなのかなと。

——— **今回は着物や帯を地域の方々から集めて、縫い繋いでいきました。着物という素材や手縫いのワークショップはいかがでしたか。**

杉原 普段は自然物を用いて制作しているのですが、着物は人間がつくったものとはいえ、人が纏ってよれていったりとか、色が褪せていっていったりとか、自然に帰っていくような側面があります。そこが自然物と近い。それに着物を通して人の記憶に触れ、手縫いをしてかたちにしていくことは、みなさんの潜在的な記憶と繋がっていく得がたい経験です。手縫いのワークショップも記憶を語り継いでいくような場と捉えていて、みなさんに参加していただき、お話をしながら、次第にその場が立ち上がっていきます。それは地域の生活の中にある文化を紡いで、その土地のお祭りをつくっていくようなことでもあるように思います。

中村 着物を持ってきてくれた女性が、それを着ていたご自身のお母さんの記憶を話してくださったり、お嫁入りの時に仕立てた話をしてくださったり、ささやかなことかもしれませんが、日本人がみんな着物をまわっていて、そこに生活があって大事にされていた、ひとつひとつの物語を託していただいているように感じました。布を触って縫っていると記憶が呼び起こされ、それについて話をし、また縫っていく。まるで記憶を縫いこめているようでした。これから別の場所で今回の作品を使って舞う時に、奈良のみなさんの記憶を私の口を通して伝えていくこともあるのだと思います。

杉原 もちろん聞いた話をすべて伝えられるわけではなく、語りえないこともあります。ただ、それは展示やパフォーマンスといった私たちの表現の中に宿り、伝わっていくのだと思います。

—— 文化村と山の辺みずえ画廊、2箇所で開催発表を行いました。
それぞれいかがでしたか。

杉原 文化村では、新しい施設に奈良の歴史的な時間軸や、あからがしが伝える自然のおそろしさを引き入れ、祭事的な場を立ち上げることを狙いました。一方で桜井市の山の辺みずえ画廊は古民家で、土地の歴史性と直接接続する場所。文化村とは対照的な空間でした。個人のお宅で、そこでの生活や歴史があり、地域のつながりがあり、公共施設としての文化村とは違う関係性や状況がありました。そのような小さなところから何か動いていくことは面白いですし、今後もこのご縁を繋いでいきたいと思っています。

中村 山の辺みずえ画廊では、お母さんのお話、おばあちゃんのお話、ご近所のお話、たくさん伺いました。「ここは昔は紺屋をやってたんだよ」「藍甕がすごく並んでいてね」「あそこの小窓から女中さんが火が落ちてないように見張っていたよ」など、お話を伺っていると、この土地の人々の物語に入っていくようでした。私はこういったことがすごく好きなんだなあということに改めて気づかされました。

—— 今後の予定や展望などはありますか。

杉原 「原始感覚美術祭」に《あからがしら》を連れていき、また舞をやりたいと考えています。美術祭は各地の精霊や記憶を集めたお祭りにしたいと考えているので、これからも長野から色々な土地に旅立ち、旅先で体験して学び、その土地の精霊を長野に連れて帰るといった往還をしていきたいです。

中村 私たちがこうして旅をして、旅先でのパフォーマンス時に「原始感覚美術祭」のメンバーが集まってきてくれます。それが各地で起こり始めています。今回のように、その土地の方々にも参加していただいて、ともに祭りの場を立ち上げることができれば嬉しいです。



信濃ノ國ヨリ至シ稀人 大和の國人ト供物ヲ祀リ
諸國ノ諸使ヲ請來シテ アカラヲ舞ヒ鎮メタマフ

杉原信幸×中村綾花による「あからがしら」滞在制作の出来事が、もし遠い昔に奈良の地の年代記に記されていたとしたら、こんな記述になるだろうか。「art」は「術」を意味するというが、ヨソからやってきた「artist＝術師」が不思議な儀式をおこない、また去っていくという内容に目を向ければ、この記述もそんなに間違っていないだろう。地域に根ざしたコミュニティへの外部からの客人を、来訪神（マレビト）としてもなす風習は日本各地に古来より根付いているが、彼らの活動はこうした存在をなぞるような部分がある。ただし、違っているのは形式である。この一連の出来事は「なら歴史芸術文化村」のAIR（アーティスト・イン・レジデンス）事業におけるリサーチと制作、その成果発表としておこなわれた。マレビトの到来は無為の偶発的なものではなく、西洋近代が発展させたアート制度において計画されたものである。

彼らは、これまでも各地のAIRに参加し、今回おこなったような土地の風習のリサーチと、それを元にした造形表現、そしてフィナーレに位置付けられる儀式的パフォーマンスを実施してきた。このマレビトのようなアーティストたちの行為とは、一種の「シミュレーション」——ポストモダン以降のアート・ワールドで顕著に見られるようになったアプロプリエーション（盗用）による表現——なのだろうか？この問いを考えるにあたっては、マレビト、杉原信幸と中村綾花の両氏の普段の活動に目を向けてみるべきだ。彼らは、自らのホーム・フィールドで一体どのような行為をおこなっているのか。

二人が拠点とするのは長野県、信濃の木崎湖畔であるが、この水と山の幸に恵まれた地で彼らは暮らしを営みながら「原始感覚美術祭」というアート・フェスティバルを主宰し、毎年開催している。これは2010年に杉原によって立ち上げられ、「原始感覚」というキーワードを共通項にジャンル混交の表現行為が集まる祭典であるらしい。縄文文化に傾倒した岡本太郎の言、「芸術は爆発だ」が市民権を得ているように、プリミティブな感性によって、ハイとロー、インサイドとアウトサイドの境界を突き破ろうとする態度が、日本には根強く伝わっている。そこでは、生活の中で培われてきた儀礼や技や民芸も、芸術としてのパフォーマンス

ンスや造形作品と同じ土俵に乗るものとなるだろう。「原始感覚」はすべての生活者に宿り、みな平等に表現者である——というメッセージが「原始感覚美術祭」の実践には込められている。

「原始」の「感覚」という、プレモダンの社会的モードに立ち戻ることで、精神を表す（文化や芸術）は高尚、物質を扱う（生活や工芸）は卑近だという、近代以降の暗黙のヒエラルキーや分断から人々を解放しようとするのだろうか。杉原自身は、都市ではなく、豊かな自然を求めて太古より人間が暮らしを営んだ信濃の地に根ざすことで、そうした分断を克服することを表明している。

都市というばらばらにされた身体性から、新たなアイデアを生み出すのではなく、自然と人が共生関係を持ちえる場所から立ち上がる身体性によって、新たなビジョンを生み出していく。そのジャンルを超えた様々な感性が集うことで、失われた身体性を回復する。自己表現や個というものに閉ざされた都市の身体性を、解き放つ大いなる身体性によって開かれるビジョンこそが、祭であり、新たなライフ、いのちの身体性かもしれない。

（杉原信幸、『原始感覚美術祭2012—静かな湖（うみ）の記憶—』記録集より）

「原始感覚美術祭」が立ち上がった翌年の2011年には、未曾有の大震災を経験した日本のアートシーンで「アートに何ができるのか」という集団的な問い直しが始まった。「個の表出」と「自己言及」の二極を内在化してきた既存の芸術制度へ疑念を抱き、立ち止まり、方向転換を迫られた契機は、アートのありかた自体を「社会化」させただろう。十年以上の歳月が経ち、その切実な自問のリアリティは少しずつ風化したかもしれないが、それでも、災害やコロナ禍のような危機がおとずれるたびに再浮上している。今日では、住民参加のプロジェクトが増え、手仕事や生活実践そのものをアートの文脈で改めて紹介する取り組みも珍しくない。「原始感覚美術祭」には、こうしたアートをめぐる価値観の変容に共感したアーティストたちも全国から集っているようだ。

大御所から若手まで、属性を超えて地域の共同体に参加する——「原始感覚美術祭」にとっては、この集ってくる外部の表現者たちこそがマレビトだ。もてなしを受ける来訪アーティストたちが、土地に眠る記憶を掘り起こし、祝祭的に造形することでローカル・コミュニティの活性化に寄与する互酬関係が生まれていく。特定の場所と

そこで離散集合するマレビトたちの年中行事のような様態は、「旅する原始感覚」プロジェクトと銘打ったAIR事業で意識化されていった。杉原たちは、自らのホームである信濃へ地域外からアーティストたちを繰り返し招致する中で、「根を持つことと、旅することの往還こそが、豊かな文化を生み出す力となる」というテーゼを深め、AIR制度をマレビト的な運動体を現代において可能にするものとしてみているのだろう。

単に招く側でも、招かれる側でもなく、彼らは外から受け入れ、また、外に出向く。その往還によりリソースを交換し合う貿易の中で、アートと生活を根底から結ぶ原始感覚なるものが相互に醸成されることを望むのだ。……となれば、冒頭の疑問は的外れだといえよう。なぜなら、マレビト概念の奪還を目論む彼らがアプロプリエート(盗用)するのは、マレビトではなく、アートの制度そのものなのだから……。

天理と桜井の人々が、このAIR事業でやってきた不思議な術師たちを歓待していたことが、何よりそれを示しているだろう。「あからがしら」を作るという彼らのため、捨てずに大切に仕舞われていた着物があちこちから提供され、手縫いでの制作には多くの協力が集まったようだ。「原始感覚美術祭」の各地メンバーも演者となった「あからがしらの舞」の場には、厳粛な祭に立ち会うかのような人々の集中があった。「あからがしら」の制作は、単に「住民参加」という言葉だけでは留まらない、共同体とマレビトとの豊かな関係の紐帯として機能していたようである。

杉原と中村が「あからがしら」伝承に注目したきっかけに、2020年の新潟市「ゆいぼーと」の滞在制作で川の道について調べた経験があるという。このとき彼らは、信濃川を遡上する鮭を素材に、豊穡への感謝を送り返す《鮭皮の船—シナヌ、マラプト・ネ》を制作した。川筋を荒らす「あから」は洪水の記憶に結びついている——彼らの原始感覚は、信濃から新潟、アイヌ、そして奈良へと、破壊と創造をもたらす川というものに対する畏敬の記憶に反応してきた。こうした地域を越えて伝わる共同体の集合意識を求め、土地から土地へと渡る彼らが容れ物となって、地域から失われつつある記憶はモノとともに託されていく。そして、この「あからがしら」の依り代もまた、マレビトらとともに交感の旅に出るのだろう。

実施日：2024年1月31日

参加者

- 天理市くらし文化部 文化スポーツ振興課 文化振興係 係長 寺垣内 真由香
- 桜井市教育委員会事務局 社会教育課 生涯学習・スポーツ振興係 秋山 恵美
- なら歴史芸術文化村 事業推進課 芸術文化係 文化村AIR担当 北村 良子

聞き手

- なら歴史芸術文化村 プログラムディレクター 松本 耕士

- 松本 本事業は実行委員会体制(天理市・桜井市・天理大学・文化村)で進めていますが、今回は、各団体の担当者によるワークチームをつくりました。その点を踏まえて今回の事業を振り返ってください。まずは桜井市さん。
- 秋山 桜井市にとっては初めて直接的に関わった事業なので手探りの状態でした。当課の事業とスケジュールが重なり、アーティストからの要望にお応えできないこともあったのですが、私たち行政職員とは違う「アーティストの視点」で街を見ていただいたり、地域の方々と交流をしてくださったりして、とても良かったと思っています。
- 松本 天理市では先行して2018年度からAIR事業を実施されていましたね。これまでの経験を踏まえて、今回はいかがでしたか。
- 寺垣内 今回良かった点は2つありました。1つは事前にアーティストの方とオンラインで話をさせてもらったことです。受け入れ体制が整えられたのと、アーティストの人となりを知ることができました。2つ目は地域の人々と積極的な交流ができたことです。地域の方とどのような形で交流していくのかはこれまでも課題だったのですが、今年は地域の方々に、より開かれた交流の場を持つことができたと思います。特に自治会でのワークショップと地元の小、中学生との交流会がとても良かったです。自治会の方々は、必ずしも招聘アーティストの活動内容に関心が高いわけではなかったのですが、「実際に参加してみると楽しかった。」とおっしゃっていただきましたし、今でも「あのワークショップはとても良かった。」という声をいただきます。自治会というコミュニティの活性化にも繋がったように思います。地元の小、

中学生との交流会は、出前授業にはせず、生徒さんの主体性を重んじて自由参加にしました。結果として、小、中学生の参加人数は少なかったですが意見交換が活発になされ、参加者・アーティスト共に有意義な時間となりました。

反省点は、ワークチーム内での情報共有や議論をもっと積極的にすればよかったということです。連携や協働を意識的に持つことで、よりスムーズに、良い事業ができたのではないかと思います。

北村 今回は招聘アーティストが1組だったので、じっくり向き合うことができたこと、ワークチームがあったことで相談できる相手がいたことが良かったと思います。苦労した点はアーティストの希望にどのように対応するか、ということです。アーティストは「今日」、「明日」という時間軸で動いています。滞在中は毎日、地域をまわり、何かを吸収して帰ってくるので、「明日これをやりたい」ということが必ず出てきます。しかし、役所という組織の中では報告や決裁などの手順があり、時間や予算的に対応できないことが出てきます。迅速に対応しようとする文化村だけで動くことになり、その動きがワークチーム内でなかなか共有できませんでした。アーティストが求めるスピード感とワークチーム内での連携を両立させることが、今後の課題だと思いました。

寺垣内 1組に絞ったことでアーティストの方と時間をかけて向き合えるようになったのは良かったと思います。ただ事業スケジュールは、実行委員会を年度初めの4月に開催して、夏にかけて募集・選考を進め、9～10月から始動することになります。そうするとアーティストが来るのが、毎年同じ季節で固定されてしまいます。「春夏秋冬と異なる季節でのAIRができれば、より面白いものになるのでは。」という思いもあります。

北村 今年度のAIR事業は最短で進めたとはいえ、単年度会計であることの難しさは、そういったところにもありますね。

松本 反省点や課題も出ましたが、来年に向けてはいかがですか。

秋山 桜井市における文化振興で、この事業をどう位置付けるかの検討が必要です。まずは市民の方にアートを身近に感じていただくきっかけとなる事業にできればと思っています。

松本 地域の人との接点をどう作っていくかはこの事業の要ですが、アートは「ようわからん」というハードルもありますね。そのハードルを越えることで、地域との連携も可能性が出てくるのではないのでしょうか。

寺垣内 市町村によって求めているものが違います。市民がアートに触れるきっかけをつくるにはどうすればよいかをワークチーム内でもよく議論し、公募要項に記載することが必要だと思います。

松本 公募要項の作成からワークチームでやるのはどうでしょう。

秋山 それは是非。受け入れ側も事前準備しやすいですし、どのような関わりができるかが見えてくるように思います。また、内部との連携も早い段階で調整できればと思います。アーティストが決まらないと動けないという部分はあるとは思いますが、学校連携などの枠を決めてしまうと自由度がなくなるというものもあるのですが、可能性は探っておきたいです。また、ワークチーム内の役割分担も議論できれば、私が異動しても後任者に引き継ぎやすくなると思います。

寺垣内 ワークチーム内で意見交換を行い、良い関係性を築きながら事業を進められたらと思います。次年度は、自治会でのワークショップと小、中学生との交流会のブラッシュアップをしていきたいです。

北村 実現は出来なかったのですが、ある中学校からアーティストによる出張授業の依頼がありました。来年度の取り組みでは、是非、学校との連携も進めたいです。また、アーティストとは、AIR事業の時だけでなく、継続的な関係性を築いていきたいです。本事業の参加アーティストが、「奈良で何かしたい」と思ったら、文化村やこのワークチームが相談相手になればと思います。そのためにも、来年もワークチームのみなさんと連携しながらアーティストとともに地域に入っていけたらと思っています。

松本 公的な事業なので成果が求められます。ただ、数字だけで測れない成果もたくさんあります。地域課題をどうやって解決するかは行政の命題ですが、そのためには、これまでとは異なった、よりクリエイティブな発想が重要になってきます。本事業の役割は大きいと思います。期待しています。

杉原信幸 × 中村綾花

生活と結びつく手仕事を行う帽子作家の中村綾花と美術家の杉原信幸のユニットです。民俗、考古などの側面から土地の歴史や文化のリサーチを行い、土地の記憶の欠片を繋ぎ合わせることで、土地に宿っている形を造形化し、その創作行為から生まれる身体による即興の舞を行います。土地の文化を受け継ぎ、生活とアートが分けられる以前の豊かな精神性と身体性を蘇らせることで、生活と美しさのともにある文化を呼び覚まします。わたしを超えて、地が語り始めること、それこそが表現です。台湾、インドネシア、マレーシア、カナダと先住民のリサーチを続けることで、先住民が常に祖先と繋がる表現を行っていることに気づき、祖先との繋がりとはいかというこを、自らのルーツとしての海の道、縄文文化を辿りながら、船、山、器、面などをテーマに様々な土地の文化を学びながら制作と考察を続けています。



- 2024年 Pier-2 Artist in Residence / Pier 2 Art Center 駁二芸術特区 / 高雄、台湾
- 2023年 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR / なら歴史芸術文化村 / 奈良祖先の道 / Museum of Asian Art / クアラルンプール、マレーシア
- 2022年 RESS Midterms / Suantio Gallery / シンガポール
えんぶりえぼし、ゑぶりすり / はっちAIR2021 / 八戸ポータルミュージアムはっち / 青森
うつろを編む / 瑞雲庵における若手創造者支援事業・公益財団法人西枝財団助成 / 瑞雲庵 / 京都
鹿ん帽と鹿舞 / UNMANNED 無人駅の芸術祭 / 大井川2022 / 三津間集落・石間家茶工場 / 静岡
巻藁船 / ファン・デ・ナゴヤ美術展2022 / 名古屋市民ギャラリー矢田 / 愛知
- 2021年 檻樓の炬燵、ゆたん / 高松アーティスト・イン・レジデンス2020 / 香川
- 2020年 ゆいぼーとAIR2020秋季招聘プログラム / 新潟
東海岸大地芸術祭2020 / 台東、台湾
ストリートアートミュージアム / 東京ミッドタウン / 東京
- 2019年 東京ミッドタウンアワードアートコンペ優秀賞受賞 / 東京
成龍湿地国際環境芸術祭2019 / 雲林、台湾

<https://www.instagram.com/nobuyukisugihara.ayakanakamura/>

なら歴史芸術文化村は、歴史、芸術、食と農など奈良県の誇る文化に触れることができる施設です。日本で初めてとなる文化財4分野（仏像等彫刻、絵画・書跡等、建造物、考古遺物）の修復作業現場の公開や、国内外から招いたアーティストとの交流、幼児向けアートプログラムなどを実施しています。

単に見学する、一方向の解説を聞くだけで終わらせず、専門家や他の参加者と対話しながら 知的好奇心を広げて学びを深めるラーニングプログラムを実践。五感で感じ、様々な人と関わり、体験して、「なぜ？」という新たな問いを生み出すことを大切に、知を探求していく楽しさを提供していきます。



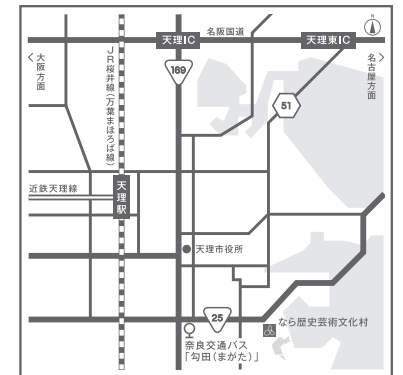
 なら歴史芸術文化村 <https://www3.pref.nara.jp/bunkamura/>

〒632-0032
奈良県天理市杣之内町437-3

開館時間 | 9:00-17:00

休館日 | 月曜日(祝日の場合は翌平日が休館)
交流にぎわい棟 9:00-18:00
(月曜営業・レストランは20:00まで)

- アクセス | ● JR・近鉄天理駅より直通バス、直通デマンドシャトル運行(有料)
- 奈良交通バス「勾田」下車 徒歩15分
 - 無料駐車場あり



なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR
ドキュメント2023

Bunkamura AIR Document 2023

編集 | 高坂玲子／正木裕介 (Gallery PARC)、北村良子 (なら歴史芸術文化村)
Editors Reiko Kosaka / Yusuke Masaki (Gallery PARC),
Ryoko Kitamura (Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex)

執筆 | はがみちこ
Author Michiko Haga

翻訳 | 勝冶真美
Translator Mami Katsuya

撮影 | 麥生田兵吾 (合同会社ウミアック) [p.11, p.15]、
Photographer Luke Liu [p.22]、衣笠名津美 [p.23]
Hyogo Mugyuda (umiak LLC), Luke Liu, Natsumi Kinugasa

デザイン | 安間仁美／刀根彰吾 (mondo)
Designer Hitomi Anma / Shogo Tone (mondo)

印刷・製本 | 株式会社 明新社
Printed and Bound by Meishinsha Co., Ltd.

発行 | なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
Publisher Executive committee of Nara Prefecture Historical and
Artistic Culture Complex Bunkamura AIR

発行日 | 2024年3月20日
Published on March, 20, 2024

